

# デルフィーヌ夫人 (第9章-第15章)

*Madame Delphine* (1881)

George Washington Cable (1844-1925)

ジョージ・ワシントン・ケイブル 著

藤 野 功 一 訳

## 第9章 オリーブ

彼女はちょうど十七歳を過ぎたところだった——自分がこれから新しい世界に入って行くことにまだその乙女の心臓をドキドキさせながらも、優美な品格あるその額に女らしさという聖なる冠を載せているような年頃だ。彼女のゆったりと撫でつけた髪の毛に隠された額とこめかみは、不健康な青白さを全く感じさせず、けだるいところなどまるでない若々しい素直さを示していた。それは南部の女性特有の、柔和でけばけばしい派手さのない美しさであった。そのピンク色のほおは、赤ら顔になることもなく、青白い白さになることなく、また、貝のように冷たいピンク色になることもなかった。その目は晴れ渡る空のような青い目ではなかったが、その顔には、他のさまざまに美しいとされる人々に負けず劣らず、大きい褐色の人の気持ちを和ませるような目によく似合う完璧な調和があった。その目には、物思う乙女の甘い謎めいた思いと混じり合った子供らしい開けっぴろげな心があらわれていた。私たちは、その顔や喉元にまったく貝のような冷たい色あいはないと言ったが、しかし、そのような表現はなんらかの欠陥をあらわしているのではなく、そこには大理石の彫刻にみられるあの暖かみのある透明な色あいがあった。

デルフィーヌ夫人の家の玄関から庭園へと続く小道は、なかばは葡萄の蔓におおわれた格子の名残で覆われ、なかばは飾り気のない椅子に寄りかかった小

さな木の幹のサルスベリの木で覆われていた。まだ日の名残のあるたそがれ時の、月明かりがさやかな時に、そこに好んでデルフィーヌ夫人とオリーブは座るのだった。

「カワイイ娘や」とデルフィーヌ夫人はそんなある日の夕暮れ、そう言った。「ドウシテそんなに夢見がちにしているの」

デルフィーヌ夫人は彼女にとって最も自然なフランス語なまりで娘に話しかけていたので、娘もその言葉で話すのが一番自然だった。

娘はその顔を母親に向けて、にっこり笑って、膝の上に乗せた自分の両手に目を落とした。その両手は力なくリボンの端をいじっていた。母親は愛情のこもった心配そうな顔をして彼女を見ていた。娘は真っ白なドレスを着ていたが、それはヴィヌヴィエイユ氏がジャスミンの茂みのもとにいる彼女を見た時と同じドレスだった。ここに忍び入ったときに、ヴィヌヴィエイユ氏は娘に見つかるようなヘマをすることなく、あのあとすぐにその場を去って、門を閉め、怪しまれぬように前と同じようにしておいたのだった。

娘は頭に何の帽子もかぶっていなかった。その落ち着いた髪の毛は、月の光のなかでつやつやとした黒色を示して彼女の体の側面を流れてベンチの上に渦を巻いていた。彼女の慎み深い衣服はあの再び流行し始めたシンプルなデザインのものではなく、当世風の流行を無視して、コルセットのひもを中世風にしっかり締めたものであった。ニューオーリンズは当世風の流行には遅れをとった場所であり、また、デルフィーヌ夫人と彼女の娘はさらにニューオーリンズの流行にも遅れをとっている人々だったのだ。軽く網目に編んだ梳毛糸でできた薄い青色の繊細なスカーフは彼女の肩の両側から垂れて、彼女の腕にかかっていた。彼女に向けられた目は必然的におだやかな賞賛の目になっていった。彼女はまさにこの庭の女神のように見えたからだ。

オリーブは目をあげた。デルフィーヌ夫人はその動作に不意を突かれ、そのためについ先ほどの問いを繰り返してしまった。

「イッタイ何を考えているの？」

夢見るような表情の娘は自分の両手のあいだにおかれた母親の手をとって、頭を垂れ、そして母親の両手にキスをした。

母親はただされるがままになっていた。そのため、その後が続く沈黙の中で、母親の問いに答えなかったことに対して娘の良心は重荷を感じ始め、そしてとうとうオリーブはしばらくして、二人して空を見上げながら、こう言った。

「ワタシ、ジェローム司祭の説教のことを考えていたんデスの」

デルフィーヌ夫人は、心配していた通りのことになったと思った。オリーブはあの説教があった日からずっとその内容について考えていたのだ。かわいそうな母親は、そのことを言わせてしまったことをほとんど後悔したほどだった。ものを食べたり飲んだりするときも、ほとんど上の空で、娘はあの司祭の説教のことをずっと考えていたのだ。

オリーブは彼女の母親の考えを感じ取り、彼女の母親が自分の考えていることがなんなのか、ありありとわかったのだと感じていた。けれども、もう自分の言うべきことは言ってしまったので、今度は娘のほうから質問をした。

「ママ、ジェローム司祭はアノ典礼書をあげたのがワタシだってことをしているのかしら。」

「イエ」とデルフィーヌ夫人は言った。「司祭様がそんなこと知るモノですか」

娘は次の質問をしたが、もっとおずおずとした様子だった。

「デモ——司祭様は、アノ人のことを知っているのでしょうか？」

「ええ、ソウですよ。司祭様は説教のなかでそうおっしゃったじゃありませんか。」

母と娘はお互いに長いことじっと見つめあって、空を滑るように登って行く月を眺め、その月を渡ってゆく、光と影が交錯する雲をみつめた。ついに、娘が口を開いた。

「ワタシが司祭だったら——ジェローム司祭くらい心がきよらかでしたらよかったのに。」

「娘や」とデルフィーヌ夫人は言った。彼女の口調は、言う勇気のないことを言おうとする力を苦勞して奮い起こしている痛々しさがあつた。——「娘や、ドウカお願いだから、この世でもう二度と会わない人のことを考えるのはオヤメ！」

乙女はその目を母親に向けて、お互いの目があった。娘はその手を伸ばして彼女の母親の首に触れ、そのほおをしばらくの間その上に載せた。そして、母親が涙を流しているのに気がついて、その唇をあけて母親に接吻すると、こう言った。

「モウ考えません。考えませんわ！」

けれども、その声はとうてい喜んで従うといったような響きではなく、悲壮なまでの決意に満ちた口調だった。

「いずれにせよ、考えても何の甲斐もないことだからネェ」と母親は言って、娘の腰に手を回した。

オリーブはまた母親へキスをしたが、今度はそれを情熱的に長く続けた。

「私にはお母さん以外いませんモノ」と娘は呟いた。「私はただの哀れな混血娘なんですモノ！」

彼女は三つ編みにした髪をかきあげるともう一度母親を抱きしめた。すると、植え込みから物音が聞こえて、娘はぎょっとした。

「ドナタデス？」とデルフィーヌ夫人は怯えた声で呼びかけた。母と娘は抱き合ったまま立ち上がった。

なんの答えもなかった。

「小枝が落ちただけヨ」と、長い間息を詰めた後、彼女はささやいた。けれども、二人は家に戻ると、家中の窓やドアを閉めて回った。

これ以上、夜更かしをしてもすっかり楽しくなくなってしまったので、彼女らは寝室へ入り、そしてしばらくして、そしてその夢の中でも、また再び小枝が落ちて物音がしはしないかと恐れながら、すぐにではないにしろ、お互いにしっかり抱き合ったまま寝入ってしまった。

## 第10章 鳥たち

ヴィヌヴィエイユ氏はもうドアや窓をのぞき込んだりするような奇妙な癖をすることはなくなった。しかし、このような症状が消え去ったことが良いことだったかどうかというと、そうでもなく、他の人が見れば、それはかえってひどく悪いことだったということがすぐにわかったことだろう——たとえば、彼

は眠れなくなってしまった。ほとんど毎晩、どの時間であろうと、連れ立って町を見回る夜警たちは、ヴィヌヴィエイユ氏がゆっくりと、誰にも邪魔されずに、夜の空を見上げながら散歩しているのに出くわすようになったのである。

「あんなに楽しそうに夜の散歩をしているナンテ」とジェーン・トンプソンは言った。「アリアひどく悪い兆候だ。もしも彼が心の中に鬱屈したものを抱えているようなそぶりでも見せているなら、そりゃそんなに悪いことじゃない。でもあんな風に穏やかにしているだナンテ——悪い予感がするよ」

検事のジェーン・トンプソンはあまりにずっとそのことを言いつづけたので、しまいには彼はそのことを論証できるとさえ思うようになってしまった。

たしかに、昼の間、ヴィヌヴィエイユ氏は静かに「銀行」の役職の席についていた。しかしそこでも、日に日に、彼のしていることは、銀行家の仕事かどんなものかを知っているものにとってはひどくびっくりするようなことをしでかすようになっていた。すくなくとも、銀行家として、ヴィヌヴィエイユ氏はすっかりそのバランスを崩してしまった。一方で、夜の散歩者としては、彼の振る舞いはすっかり変わってしまって、最近では、彼は静かに何かを警戒している様子で、しかもそれは誰かを探しているというのではなく、誰かに出くわすのを避けようとしているかのようであった。

「オリーブ、我が娘」とデルフィーヌ夫人はある朝、教会のタイルの上に二人でひざまずきながらささやいた。「あそこにいるのはヴィヌヴィエイユ氏ダヨ！ チョット目をあげてみたら——通路をちょうど歩いているところだよ。ああ、目をあげるのが遅すぎたね。アノ人はもう横の戸口から出て行ってしまった」

母親は、オリーブが自分と一緒にいるときに限って、いつもヴィヌヴィエイユ氏が姿をくらましてしまうのは、いったいどういう神様の思し召しだろう、と不思議に思った。

夜も明けやらぬある早朝、デルフィーヌ夫人は腕にからのバスケットをさげて、自分の家の前の歩道に出た。そしてとても静かにドアを閉めてかぬきをかけて、日の昇る前の静かな町中へそそくさと歩いて行った。遠くの市場の建物の区画から、肉屋がガスコーニュ語で歌う歌と、肉を切る鈍の音が聞こえてくる。デルフィーヌ夫人は娘のオリーブのためになにか鳥の肉がないかと思っ

ていた——娘の食欲がひどくなくなっているのだ。彼女は外に出るときはきまって、大聖堂に立ち寄って祈りを捧げることに決めていた。祈りを捧げてから仕事をするのだ。

「ときに人は、信ずるモノのためならたとえ大胆なことでもやっけてのけるモノだわ」と彼女はおずおずと歩を進めながら考えた。けれども、彼女が十歩も歩かないうちに、彼女は自分の向こう見ずな行為を後悔し始めた。誰かが彼女の後をつけてきているのだ。

その足音が男のものだからといって、むやみと恐れることはないかもしれない。けれども、恐ろしい秘密が彼女の心を占めていたものだから、デルフィーヌ夫人はそんなことを考える余裕はなかった。昨日の朝、彼女は庭先に見知らぬ人物の足跡を見つけたのだ。彼女はそのことをオリーブには打ち明けず、一晚中まんじりともしなかったのだ。

彼女をつけているのは、あの足跡の主だろう。彼女は足を速めたが、その足跡は遅れずについてくるのだった。彼女はほとんど走らんばかりになった。それでも足音はついてくる——近づくでもなく、離れるでもなく。二つの恐怖がいっぺんに彼女を襲った——ひとつは彼女自身の身の危険についての恐怖で、もうひとつは家に一人で残してきた娘のオリーブの身の危険についての恐怖だ。けれども彼女はただ、「神様、我が娘をお守りクダサイ！」と祈るくらいしかできなかった。しばらくおそろしさでいっばいになりながら歩いたのち、彼女はようやく安全だと思えるところ、大聖堂にたどりついた。そこまできて息を切らせながら、彼女はようやく礼拝の間にひざまずいて、いったい誰がつけてきているのか、落ち着いて考えることができるようになった。とりあえず一休みしたあと、彼女は立ち上がって、大急ぎでオリーブのもとへ帰る道のりがさやけくありますようにと、あらゆる聖人に願い祈るのだった。

彼女は自分がやってきたところとは別の出口からでようとして、あちらこちらと目をやったが、そのとき心臓が口から出そうなくらい驚いたことに、

「カラゼ夫人」

と呼びかけられた。

彼女はほとんど叫びだしそうになりながら、あわてて歩き始めたが、その声

はとても優しくおだやかなものだった。そして、ヴィヌヴィエイユ氏が壁際の暗がりから現れた。ベンチの横で対面すると、デルフィーヌ夫人はベンチの上にバスケットを置いた。

「アラ、ヴィヌヴィエイユ様。アナタにお会いできて、神に感謝しますワ！」

「本当デスカ、カラゼ夫人？一体どうしてです？」

「男が家のところからずっと私の後をつけてきてるんデス。」

「その通りデスよ、ご夫人、私はソイツを見ました」

「ソノ人をご覧になりましたの？どんな人でした？」

「たった一人で、馬鹿みたいに歩いてましたナ。他の人々が言うには、彼は気が狂ってるんだそうです。デモ、あいつはアナタに危害など加えないでしょう」

「デモ私、娘が心配ですわ。」

「だれもアナタの娘に手出しはさせませんよ、カラゼ夫人」

デルフィーヌ夫人はそう話している人物の不思議なほど親切そうな、辛抱強い目を見つめ、そしてその目から心を溶かすような安心感を得た。

「ご夫人」とヴィヌヴィエイユ氏は言った。「いったいドウシテ、こんな早い時間にお出かけされているんですか？」

彼女は彼に自分の用向きを伝えて、自分がどこでそういったものを手に入れられるかを尋ねた。

「ソウデスナ」と彼は言って、「手に入りますヨ——タシギ鳥とか、その類いのものが。しかしまた、ドウシテあなたの娘さんは食欲が落ちなさったんです？」

「アア、旦那様」——デルフィーヌ夫人はもう千回も、その、娘の真意というものを覆い隠している甘い、重苦しい、しんねりとしたカーテンを引き上げようとしてはいたものの、その半分も引き上げるのに成功したことはなかったのだった。——「アア、旦那様、あの娘は何にも言おうとしないんデス！」

「デモ、ご夫人、アナタはどう考えているのデス？」

「旦那様」と返事をする、彼女は両目にいっぱい涙をためた目を見上げて、またその目を伏せると、こう言った「私が、私が思うに——あの娘は恋しがって、寂しがっているんだと思いマス」

「アナタはそう思うんですね？」

夫人はうなずいた。

「アア、カラゼ夫人！」と彼は半ば手を夫人の方に延ばしながら言った。「アナタもお分かりのとおり、娘さんがそんなにかたくなに守っておられる秘密を貴方から聞き出そうだなんて、酷な話だ。ご夫人、聞いたのは私の間違いデシタ」

「イイエ、そんな、旦那様！」

「いえ、ソウなんです。そうなら、私がアナタの娘さんの後見人になれるなんて可能性は、ひとかけらもないことになりますナ！」

デルフィーヌ夫人は驚きと不安におののいた。

「そういう後見人になれるような人物は一人しかおりませんナ」

「でも、それは誰です？旦那様」

「カミサマですよ」

「モウ、旦那様は——」と、夫人は昔日のあの魅力的な振る舞いの片鱗をのぞかせながら彼の方を見た。

「私はアナタをからかっている訳ではありませんヨ、カラゼ夫人」と彼は言った。

夫人は目をあげた。その目は涙でいっぱいだった。彼女が頭を振ると、涙が落ち、彼女は唇をかんだ。それから微笑んで、それから急に顔を両手で覆うと、ベンチに座り込んで、身体を震わせて泣き始めた。

「アナタはわたしのいっていることがよくわからないのですナ、カラゼ夫人？」

そう言われても、彼女にはちっとも分からなかった。

「私が言っているのは、アナタの娘さんの為に見つけなければならないのは、彼女の夫だということです。そしてカミサマ以外には、それを見つけれられる人はいないってことなんデス。」

夫人は立ち上がった。彼は続けた。

「モウお家にお戻りなさい。私がおの夫を捜してあげます」

ああ、デルフィーヌ夫人は自分で自分のことをどうすることもできない、自



分の言いたいこともはっきり言えないような、臆病者であった。けれども、彼女の目だけは彼女がこのヴィヌヴィエイユ氏の申し出にひどく不満を抱いていることを示していた。すると、ヴィヌヴィエイユ氏は、わかっているとでも言いたげに、彼の手を差し出した——その手が彼女の肩に触れた——そして依然として親切そうに、だからといって押し付けがましくなく、こう言った。

「白人の夫をデスヨ、ご夫人。それは可能なんです。それが可能だってことを、ワタシハ知ってるんです。白人の紳士ですよ、ご夫人。アナタはまだ私を信じていらっしやらない。私とその夫を連れてきましょう。さあホントに、いまはあなたのお家に急いだ方がいい」

デルフィーヌ夫人は、手に持ったハンカチーフを指の間で意味もなくねじりながら、目を下に落とした。

彼はその申し出を繰り返した。

「ソノトキはアナタが真っ先に来ていただけなのですネ？」と彼女は意味深く聞いた。

「もしアナタがそう望むのデシタラ」

彼女はもう一度目をあげたが、今度は信用しきった目をしていて、

それが彼女の答えだった。

「サア」と彼はおだやかに言った。「私がアナタの娘さんになにかイイ鳥肉をお送りしましょう」

そして彼らは大聖堂から出て行った。デルフィーヌ夫人の心は意気揚々として大胆になり、彼女は出て行きながらつついこうやってしまい、すぐに彼女は自分のいった言葉を恥じてひどく真っ赤になった。

「ヴィヌヴィエイユ様、ジェローム司祭でしたら、きっと誰がイイ人かをアナタに教えてくださいませわ」

## 第11章 面と向かって

デルフィーヌ夫人は帰ってみて、自分の家が焼かれてもいなかったし、銃による襲撃を受けたわけでもないことを確かめた。

「アア、私のかわいい父なし娘！」彼女の色褪せたボンネットの帽子はみっと

もなく彼女の両肩のうしろに落ちて、ひもでひっかかっているだけで、持っていたバスケットは地面に落ちて、中に入っていた小さなタシギ鳥の肉が取っ手のところからごろりと転げだし、オクラとスープの素がころころと床に転げ出た。「ワタシの小さい娘、さあ、私にキスして、キスして！」

「デモ何か良い知らせか、悪い知らせでもあるの？」

と、四回か五回、娘は尋ねた。

「神様だけがご存知ですよ、かわいい娘、これからドウなるかなんて、私にはわかりゃしないからね！」

母親はいすに座り込んで、エプロンでその顔を覆い、そしておいおいと泣き始めた。そして眼をあげて笑おうとすると、また改めて泣き始めるのだった。

「このごろ、いったい何をなさっているの？」と娘は長く続く、まるで優しくなでるような声で言った。娘は前にかがんで、彼女の母親のボンネットの紐を解いた。

「まったくナンデモないのよ、娘や。ナンデモないの——私はただのバカものなんだよ」

娘の目は涙であふれた。母親は目をあげるとその顔を見て、こう言った。

「ああ、ホントウに、ナンデモ、ナンデモないんだよ。ただ——」

そう言って自分の頭をゆっくりと、気持ちを込めて力強く振ると、こう言った。「ヴィヌヴィエイユ氏は、一番の——この神様の統べる世の中で一番のお方だヨ！」

オリーブは自分の母親のほうに椅子を引いて、座ってその小さな黄色い手を自分の白い膝の上にのせた。それから優しく母親の目を見つめた。デルフィーヌ夫人は自分の気持ちを打ち明けたいという気持ちになってきた。何か言ってみせなくちゃならない。

「アノ人は、この鳥肉を送ってくれたんだヨ！」

娘は少し顔を引いた。小柄な母親は向こうを向いて、彼女の涙にくれた微笑みを隠そうとしたが、無駄だった。それから二人は一緒に笑って、オリーブは笑いながら母親にキスをするのだった。

「何か他にもあるンデシヨ」と彼女は言った。「教えてほしいワ」

「ソウヨ」とデルフィーヌ夫人は答えた。「タダちょっとばかり待ってからネ」けれども、ほんとうは、母親にはそんなふう待つような余裕はなかった。その次の朝、それでも朝食からかなりたってから、母親はオリーブのところに来て、おずおずとした、しかしびっくりするような提案をした。長いこと締め切っていた居間を精一杯きれいに整えたいというのだ。オリーブは不思議そうな、困ったような顔をしたが、同意したので、そのため母親は上機嫌になった。

掃除が始まり、すぐに引き続いてバタバタという音、ゴロゴロ転がす音、物を持ち上げたり降ろしたりする音が聞こえ、そして埃を立てたり吸い込んだり、テレピン油の匂いや真鍮、軽石、毛織のボロ布などが、この家の家政婦の怒りに任せた奮闘を特徴付けるものとして聞こえてきたが、それでも、その掃除が進むにつれて、デルフィーヌ夫人の心は明るく、その小さな瞳はキラキラと輝き始めた。

「ワタシタチはきれいな居間が好きですものね、娘や。全く誰も訪ねてくるわけがなくてもね。ソウダロ？」と彼女は言って、家の中に入ると、午後も遅くなってからとうとう席に座った。彼女は持っている中でも一番の衣装を身につけていた。

オリーブはそこにはおらず、返事もなかった。母親が娘を呼んでも、返事がなかった。彼女は不安になって立ち上がると、庭の方に空いている戸口のところを数歩外に出たところに娘がいるのを見つけた。そこは古い格子戸で囲まれたあずまやに続く小道になっているところだった。オリーブはゆっくりとこちらにやってきて、彼女の顔はひどく青く、取り乱していた。その表情には敵意に満ちた落胆による苦悩の表情が浮かび、そして、震えるような、訴えかけるような調子で、両手を母親のほおにあてて脅かすように、こういったのだった。「オカアサン、一体誰が今夜ここに来るんですの？」

「なんだい、娘や、ただ言うてみただけじゃないか、ここをきれいにして——」

けれども娘はかんしゃくをおこした。

「モウ、教えて頂戴、お母さん、一体誰が来るの？」

「わかったよ、可愛い娘、ヴィヌヴィエイユ氏が来るんだヨ！」

「ワタシに会いに？」と娘は叫んだ。

「ソウだよ」

「アア、お母さん、一体どうして？」

「なんだい、娘や、ホントに」と小柄な母親は眼に涙を流しながら叫んだ。「ワタシが死んだ時に、ヴィヌヴィエイユ氏には後見人になってもらうって約束をしたじゃないか」

娘は母親に背を向けた。そしてドアをあけて中に入ってしまった。けれども彼女はもう一度顔だけ振り向くと、母親に手を差し伸べて、こう叫んだ。

「イッタイどうやって——アノ人は白人じゃないの、それでワタシはただのかわいそうな——」

「アア、かわいい娘や！」デルフィーヌ夫人は答えると、娘が伸ばした手をつかんだ。「そこが、そこがアノ人がこの世で生きていの中で最も素晴らしい人である理由なんだヨ！アノ人はそのことは十分承知してる、でも会ってくれると言ってくれた。それにあのひとは、お前に誰かふさわしいひとを紹介してくれるとまで言ってくれたんだヨ！」

オリーブは母親の手を乱暴に振り払うと、母親を後ずさりさせるような身振りをして、誇り高くすくと立つと、あまりに憤慨したので声も出ないような様子で顔を赤らめた。けれども次の瞬間には、彼女は叫び声をあげて、床に泣き崩れたのだった。

母親は彼女のかたわらに跪くと、その肩に両手を置いた。

「アア、かわいい娘、泣かないでおくれ！お前には知らせたくなかった。お前には知らせたくなかったんだよ！おまえがそんなに泣くなんて、かわいそうに。ヴィヌヴィエイユ氏はおまえが、おまえの望むようなひとと結婚させたいと言っているんだよ。そうでなければ結婚なんかさせないって、オリーブ、そうでなければ結婚なんかさせないってネ」

「結婚なんかしないわ、結婚なんかシナイ、シナイ、シナイ！」

「ソウさ、そうだよ、オリーブ」と母親は言った。「結婚なんかしやしないヨ。アノ人は今日は誰も連れて来やしないヨ。それにこれからだって、誰も連れてくるもんかネ」

オリーブは急に立ち上がると、黙って母親が付き添おうとするのを拒否して、中二階の自分たちの部屋へと一人で歩いて行ってしまった。

デルフィーヌ夫人は緊張して、ドアから窓へ、窓からドアへととうろうろしていた。そしてこんどは、耐え難いほど陰鬱に見える、家具をあたらしくしつらえなおした居間に入っていった。部屋の隅には大きなアルガンランプがあった。その日、夕方の照明のために彼女はどんなに苦労してそのランプをしつらえたことだろう！そのランプの少し向こうには、壁のところに、十字架がかかっていた。彼女はそこに跪いて、目を十字架にしっかり向けて、黙って夕方の影が濃くなってその十字架の輪郭がはっきり見えなくなるまでそのまま祈っていた。

彼女は立ち上がった。その少し後、彼女がランプをつけようと苦労しているときに、歩道をこちらへやってくる足音が聞こえ、立ち止まるのが聞こえた。彼女の心臓は止まりそうになった。彼女は手に持っていた燃料の箱をそっと置いた。石畳のところをおだやかにきしらせて足音が近づき、そしてデルフィーヌ夫人は、雷のように心臓がドキドキと音を立てているように思いながら、ノックも待たずに、ドアを開け、頭を深く下げると、穏やかだが不安そうな声でこう叫んだ。

「イラッシャイマセ、ヴィヌヴィエイユ様！」

彼は手に帽子を持って入ってきたが、いつものようにほとんど物音をたてないような足取りであった。彼女は彼に椅子をすすめ、ドアを閉めると、それからいそいで、わびの言葉を言いながら、ランプをつける仕事に戻っていった。けれども彼女の両手はまたその仕事をしようとして止まってしまった——オリーブの足音が階段から聞こえてきたのだ。それからその足音は階段から降りて、そして隣の部屋に向かい、それからゆったりとガウンの衣擦れの音が聞こえ、かすかな香水の息づかいがして、雪のように真っ白な服を着た姿がドアのところに現れた。娘はナイトドレスに着替えていた。

「オ母サン？」

デルフィーヌ夫人は必死になってランプをつけようとした。そしてそのとき

ちょうど、ランプが小さなビーズのような光をともした。

「ココよ、娘や」

そう言って彼女はドアのところに急いで行った。そしてオリーブは、第三者がいるとはおもわず、白い両腕を上げて、母親の首にその両腕を巻きつけると、母親が話そうとする努力を無視して、その唇に熱心にキスをした。ランプのガラスは弱い光を放っている。そのランプの光が少し強くなると、部屋の四隅が照らし出された。天井も壁も、十字架もみな照らし出され、部屋にしつらえた家具もはっきりと見えるようになった。

「オ母サン！」そうオリーブが仰天したようなふるえ声で叫んだ。

「紹介しましょうネ、ヴィヌヴィエイユ様ですよ、娘や——」

薄暗い闇がびっくりした乙女の目の前で溶けてゆき、影のような人物が一番遠くの壁のところから現れた。そしてランプの光がすっかり明るくなると、そこには乙女の心の中に焼き付いて離れなかった、あの、海賊ルメートル船長の静かな顔と、身じろぎもしない姿がはっきりと現れたのだった。

## 第12章 母鳥

ルメートルがデルフィーヌ夫人のところを訪ねて三週間ほどが経ったある午後、司祭は教会の仕事で、彼の小さな家の玄関から数歩も出ないうちに、ある人物に追いつかれ、その外套を引っ張られた。

「ジェローム司祭——」

彼は振り返った。

彼が面と向かった顔は、興奮と苦悩ですっかり様変わりしてしまっていたので、すぐには司祭にはそれが誰かわからなかった。

「オヤ、デルフィーヌ夫人じゃないですか——」

「ああ、ジェローム司祭！あなたにお会いしたくて仕方ありませんでしたわ、ええ、本当に！ワタクシ、アナタに申し上げたいことがあるんデス」

こんなふうにはフランス語と英語の二つの言葉で喋った方が、どうやら一つの言語で喋るよりも、ずっと物事がうまくいくのだと、彼女は考えているようだった。

「応接間ノハウニ戻ッタハウガイイヨウデスナ」と司祭は彼らのももとの言葉のフランス語で言った。

彼らは応接間に戻った。

デルフィーヌ夫人の足取りはすっかり変わってしまっていた——神経質で、疲れ切ったような足取りだった。彼女は歩きながら腕をゆすって、七面鳥の尻尾の羽で飾りをつけた扇を振り広げた。

「ワタクシ、ここであなたにお会いできたのはとても良かったですワ」と彼女は正面の、外側の戸口を登りながらそう言った。その言葉の後に続いたのは、かすかな、味もそっけもない笑い声で、無意識のうちに怒りを込めて彼女は扇をパタパタさせた。

「マツタク暑いですわね」と彼女はまた言うと、司祭が勧めてくれた椅子に腰をおろし、扇であおぎ続けた。ジェローム司祭は帽子をタンスの収納に置くと、顔の汗を拭きながら、彼女の真向かいに座った。

「ソレデどうしたんです、カラゼ夫人」

その口調は穏やかだったので、彼女はあおぐのをやめると、膝のところに扇を置いて、扇の羽毛を綺麗になでつけながら、話し始めた。

「ジェローム司祭——」彼女は唇を噛むと、頭を振った。

「どうしたんです？」

彼女はわっと泣き始めた。

司祭は立ち上がって窓のカーテンを下ろした。彼はそれをゆっくりとした——出来る限りゆっくりとして、そして、彼が戻ってくると、彼女は急に元気な顔をして、こう叫んだ。

「アア、ジェローム司祭、法律が蹂躪されたんです！法律が蹂躪されてしまった！私が法律を踏みにじったんです！私が！私が！」

そして涙が再び湧き出てきて、そして彼女は唇をしっかりと結ぶと、無言で彼女の顔をゆっくり向こうに向けた。ジェローム司祭は答えるのを少し待ってから、それから重々しくこう答えた。

「思うに、それはたまたまそうなってしまったのではないデスカ、デルフィーヌ夫人」

小柄な牧師は希望を感じていた——自分の前で女性が泣き出す時はいつも感じる希望だった——自分が人間ではなく天使になって、その涙で濡れたほおを自分の胸に十分埋めれば、涙もろい神様はきっと法律家や判事が彼女を傷つけるのをやめさせてくれることだろうと。彼はもう数分がたつのを待って、それからこう聞いた。

「ソウジャアリマセンカ、デルフィーヌ夫人。そうでしょう？」

「いいえ、ジェローム司祭。ソウジャナインです。私の娘が——ああ、ジェローム司祭、私は自分の娘を婚約させたのです——白人の男性と！」

そして急に、片一方の手はひっきりなしに扇をあおぎながら、デルフィーヌ夫人は荒々しく震える片手でスカートのねじれをのばしはじめた。

「その二人は結婚することになりそうなんデス」

司祭の顔には苦しそうな驚きの表情が浮かんだ。彼はゆっくりといった。

「ソナナことが可能なのですか、デルフィーヌ夫人」

「エエ」とデルフィーヌ夫人は答えた。最初は目もあげずにそう答え、それから、もういちど、涙をいっぱいにとめた目で司祭を見ながら、「エエ」と言った。「エエ、本当なんです」

「ソノ相手の男は、いい人なんですかね？——まちががなく？」

「神様の続べるこの世の中でも、最も良い人ですワ！」とデルフィーヌ夫人は答えて、有頂天な笑顔になった。

「私の哀れな、愛おしいアナタ」と司祭は言った。「心配なのですが、アナタは誰かに騙されているのではアリマセンカ？」

たゆむことのない信頼による誇りが、その声に勝ち誇った調子と微笑みで答える勇気を与えた。彼女はゆっくりと頭を起こし、頭を振って、こう言った。

「いいえ、イーイーエ、司祭様！アア、そんなこと、そんなことありませんわ！ウルシン・ルメートル・ヴィヌヴィエイユに限って！」

これを聞いて、ジェローム司祭はすっかり当惑してしまった。彼はふたたび向こうを向いて、そして、両手を後ろで組むと、目を下に落として、ゆっくりと床の上で歩をすすめた。

「ソウですな、彼はいい人デスな」と彼は言った、徐々に、彼は自分の考えを



声に出していおうとしていた。とうとう、彼は彼女の前で足を止めた。

「デルフィーヌ夫人——」

彼女は、司祭の歩みをじっと見つめていた、苦悩に満ちた目をあげた。

「思うに、ウルシンについて人々の言っていたことは、正しかったのでしょうか」

「一体なんのことデス？」扇であおぐのをとめて、混血の夫人は尋ねた。

「ウルシンが正気でナイと、言っている人々がいるということデス」

「アア、なんてことをおっしゃるの、ジェローム司祭！」彼女はまるで司祭に叩かれたように、飛び上がるように立ち上がると、手を振り回し、扇を持った手をバタバタとさせて、司祭の言葉を打ち消そうとしたが、急に両手と両目を天に向けるとこう叫んだ。「アア、神様——神様——だったら、この世の中全体が狂っているんですわ」彼女は沈み込むように、震えながら椅子に座り込んだ。「アア、ちがう、ちがう、そんなことありませんわ」と彼女は頭を振りながら言葉が続けた。「ヴィヌヴィエイユ氏が狂ってるだナンテ、ありえませんが」彼女の目は急に怒りに燃えた。「ソレはあの白人と黒人の結婚を禁じた法律が悪いんですわ！あの法律こそ気違い沙汰です！あんな法律、馬鹿馬鹿しい限りですわ！」

考えの足りない司祭だったら、法律は——法律だと答えるであろう。けれども、ジェローム司祭はこのことについてはっきりと答えを聞かせて欲しいと思っているということがわかった。そこで彼は優しくこう言った。

「デルフィーヌ夫人、司祭は法の執行人ではありません。むしろ医者だと申せましょう。私はアナタをお助けしたい。どうして欲しいのデスカ？」

彼女の目に一瞬よろこばしげな光がともった。しかし、彼女が司祭にお願いをしようとするその声の調子には、悲しげな敵意がまだ残っていた。

「コンナへんてこりんな仕組みを作っておいて、ワタクシにどうしろというのですか？」

司祭は両手を振って、しばらくそれを広げると、否定をするように「ああ」と言った。彼はまたそろそろと歩を進めようとしたが、また彼女の前にきて、こう言った。

「ドウシテこんな、白人と黒人の結婚を禁ずる法律を作ったかですって？ そうですな、二つの人種がまざらないようにしようとしてでしょうな」

デルフィーヌ夫人が大声で、辛辣な、怒ったような声で笑ったので、司祭はぎょっとした。その目は怒りに燃えて、唇はさげすむようにめくれ上がった。

「ソレナラ、ジェローム司祭、人々は嘘っぱちを作ったということになりますワ！ マザラナイようにですって！ イーイーエ！ 誰も我々を別れ別れにしておきたいなんて思っていないわ。とんでもない、とんでもない！ でも、人々はみな私たちを軽蔑し続けていたいんでしょうネ！」 彼女は手を胸に当てて、肉体的な痛みに耐えるように眉をひそめた。「デモ、まあそうだとしましょう！ いったいどの人種から、人々は私の娘を引き離したいんでしょうかネ？ 彼女は十のウチ七くらいは白人ですわ。法律によっても、彼女は問題なく白人でいられるンです。それで、いま、娘が白人の善良な妻となろうとしている。娘がそうしたいというのを、法律は止めることができるンですか？ まさか、そんなことありえませんか！」 彼女は立ち上がった。「イーエ、私は、法律というものがどういふもののためにできているか教えてさしあげますワ。法律は、私の子供が——自分の——父親を——選べなかった——そのことを罰しようとしているンデス！ ジェローム司祭、まったく、なんという法律なんデショウ！」 彼女は椅子に座った。涙が洪水のようにあふれ、彼女はそれを止めようもなかった。

「いいえ」と彼女は再び話し始めた——そしてここで彼女は急に英語で話し始めた——「私については、どうだろうと構いませんわ。でも、ジェローム司祭——このことを言いたくて私はあなたのところに来たんです——だれも私の娘を罰したりなどできませんわ！」 彼女はまた立ち上がり、扇でいっぱいになった胸をぱたぱたとたたきながら言った。「あの娘は、だれであれ結婚したい相手と結婚するんです！」

ジェローム司祭は、彼女がしまいまで言い切るのを待っていた。彼女のぱたぱた動く手も彼女の言いたいことを邪魔はしなかったし、ジェローム司祭も邪魔はしなかった。だがここで司祭の決心もつき、彼は指先で彼女に優しく触れた。

「デルフィーヌ夫人、もうお家にお帰りなさい。お帰りなさい」

「あなたはどうかなさるおつもりですか」

「何もしません。しかしお家にお帰りなさい。静かになさっていることです。ことを荒立ててはいけません。ウルシンには私から会いに行きましょう。私たちはあなたのためにも、法律をどうにかしましょう。」

「あなたが法律をどうにかしていただけるんですか！」と彼女は喜びの声を上げて叫んだ。

「やってみましょう、デルフィーヌ夫人。御機嫌よう！」

彼は手を差し伸べた。彼女は手を握って三度それにキスをし、その手を涙で濡らし、そして同時に目をあげて彼の目を見ると、つぶやいた。

「神様のお造りになった人間の中で、一番の方！」

ドアのところで、彼女は振り向くと、彼女はもっと正式な形でお別れの言葉を述べた。けれども彼は帽子もかぶらずに、彼女の後に続いて家を出た。ドアのところで彼らはちょっと立ち止まり、それから簡単にアディユーと言ってわかれわかれになった。彼女は家に向かい、そして彼は帽子を取りに家に戻り、それからふたたび中断していた仕事を済ませるために家を出て行った。

司祭が自分の家に戻る前に、彼はヴィヌヴィエイユ氏の住んでいる場所にいったみたが、そこに彼の姿はなかった。

「じつのところ」と召使がドアのところで言った「ご主人は、数日か数週間の間、帰ってこないと言っておりました」

そこで、ジェローム司祭は随分驚いて、もういちど回り道をして、ヴィヌヴィエイユ氏の雇っている事務員のうちの一人の住まいに寄ってみた。

「そうです」と事務員は言った。「彼の指示は、彼の留守の間、なるべく事務的に、そのままの状態を維持して、通常の仕事が続けるように、ということでした。すべてのことは、名目上の活動ということですが。」それから、彼はこうささやいた。

「政府の役人が彼を探しているんです。どうやら、数ヶ月前の、アメリカ政府によって海賊船ポープスが拿捕されたときにつかまった囚人たちから、情報が漏れたらしいんです。でも」——そしてさらに小さなささやき声で——「恐れ

ることはありませんよ。あいつらがアノ人を見つけられっこありません。この件については、ジェーン・トンプソン氏とエヴァリステ・ヴァリラット氏がアノ人をよくかくまってくれますでしょうから。」

### 第13章 苦難

次の土曜日は美しい日だった。朝方、街には少しばかりの通り雨が降って、そして午後じゅうずっと、水平線のそこここに、また雨が降りそうな気配があった。地面が再び乾くあいだに、そよ風が涼しくそしてやさしくふいて、湿った葉の香りを運んできて、そして太陽がしょっちゅう顔を出したり雲で隠れたりして、景色に愉快的な変化をつけていった。

ジェローム司祭の小さな庭には、小さな家の右手の奥の方に、私たちがまだあまりそのことについて言及してこなかった小道があり、その道の終わりには小さな懺悔室についた窓があって、両側にはチリメンギンバイカが古くねじれてはいるが花をいっぱい咲かせており、ところどころにバラが気取りのない変化をあたえ、そしてもう一方の端には聖廟があり、その青い壁龕へきがんのなかには祈りの手を組んで天国へ目を向けている聖母マリアの小さな像が立っていた。その小さな部屋についた窓以外にはその場所を見下ろす窓は一つもなく、そのひっそりとした隠れ場にいるのが、ジェローム司祭にはしばしば大変な慰めになっていたのだった。

全体でたったの数歩の距離ではあるけれども、司祭は懺悔室で長いこと座った後で、しばらくの間、新鮮な空気を吸いながら、この小道を行ったり来たりして歩き回った。懺悔に来る人々がこの午後は殊に多かった。彼はウルシンのことを考えていた。アメリカ政府の役人たちは彼を見つけてはいないし、また、ジェローム司祭が彼と会ったことをつかんでもいなかった。けれども、もしも政府の役人達が彼を探すのを諦めたら、間接的なやり方で、自分たちは簡単な計略を用いていつでも「あの法律を抜けがけ」することにしよう決めていた。それというのも、逃亡者のウルシンを見かけないとはいえ、デルフィーヌ夫人はウルシンにあってるのだし、彼女が司祭とウルシンの間をとり結んでいるからだ。いま嗅ぎ回っている連中は、あの、モッキングバードがさえずり、娘

が白い服を着て歩いているオレンジの木のある場所をまだ知らない。そして、「抜けがけ」するやり方はあのジャスミンの香りのする庭に頻繁に集まる三人の間ですでに決められていて、船を一つだして、このルイジアナの法律が届くはずのないフランスまで二人を運ぶというものだった。

ヴィヌヴィエユ氏を探している人々にはほとんど確実なことだと思われているのは（そして実際、それは真実だったのだが）、ジェーン・トンプソンとエヴァリステ・ヴァリラットがヴィヌヴィエユ氏をかくまっているということだった。けれどもそういう手がかりがわかっていたところで、ヴィヌヴィエユ氏を見つけ出そうとする捜査は、まったく無駄に終わった。ヴィヌヴィエユ氏の小さな銀行の資本はまったく揺るぎもせず、また、ジェーン・トンプソンは、彼がすでに知っていることをもう一回わざわざ捜査官たちが嗅ぎ回って調査し、すでに自分が知っているような同じ事実関係を見つけたからといって捜査官たちがやる気を無くさないようにと、捜査官に怪しまれそうな資金の関係事項についてはあらかじめ幾つか事実を述べ、また、その資本の持ち主となっている有力紳士の名を挙げて、捜査官たちがわざわざ銀行に対してなにか懸案事項を調べようというような気を無くさせたのだった。

ジェローム司祭は手を後ろに組み合わせて行ったり来たりして、これらのことを考えてみた。窓から一番離れた小道の終わりに来ると少し立ち止まって、空をくまなく見回すと、またもとにもどる道へとからだの向きをかえた。すると、司祭はからだにぴったりとヴェールをはおった女性の姿が小道の反対側にたっているのが見え、すぐにそれがオリーブだとわかったのだった。

彼女はひどく熱心な様子で、急いで近くに来た。

「ワタクシ、懺悔に来たんデス」彼女は言うと、息せき切って、そのヴェール越しに興奮している彼女の両目が輝いていた。「デモ、来るのが遅すぎたようデスね」

「懺悔をするのに、遅すぎたり早すぎたりするということはありませんヨ。いつでも大歓迎デス」と司祭は言った。「ケレドモ、お母様はどうなさってるんデス？」

「アア！——。」

彼女の声は弱々しく震えた。

「何かもっと悪いことデモ？」

「アア、司祭様、私が悪いことをしてしまったんです。アア、ジェローム司祭、私は自分の母親にあまりにも多くの苦勞を背負いこませてシマイました！」

ジェローム司祭は彼のかたわらにヴェールをまとった娘を連れて、目を落として、ゆっくりと家の方に歩いていった。

「ソレはあなたのせいではありませんよ」と彼はしばらくして言った。それからまた少し間をおいて、「モウ全て準備万端整っていますからね。」といった。

彼は目をあげると、ヴェール越しであっても、彼女が顔を真っ赤にしているのだというのを見てとった。

「イエ、イエ、」と彼女は答えた。低く、絶望した声で、顔を落としたままだった。

「イッタイ何が難しいことがあるんです？」と司祭は尋ね、家の正面へと続いてゆく小道の曲がり角で立ち止まった。

彼女は顔をそむけた。そしてチリメンギンバイクの木の皮のうすいささくれを指でつまみ始めた。

「トンプソン夫人と彼女の夫が今朝、私たちの家に来たんです。アノ人がトンプソン夫人に、そのことについて全て話したんです。トンプソン夫婦は、最初私にとっても親切でした。でもあの人たちは私を——」彼女はむせび泣き始めた。

「イッタイ彼らは何をしようとしているんです？」と司祭が聞いた。

「あの人たちは私に、アノ人の気が違っていると信じさせようとしているんです。ソナナコトをしようとしているだなんて、気が違っているに違いない、ソナナコトできるわけがないって」

彼女は引き続きヴェールの下でハンカチを動かし続けていた。

「そして、思うにあなたのお母さんはとても怒ったんですね。ソウでしょう？」

「エエ。そしたらご夫婦はもっと躍起になってソナナコトはできないって言い募って、そしてもし私たちがアノ人へ、二十四時間以内に、私たちが、書かなかつたら、書こうとしなかつたら、あの、破棄しますって、その——」

「婚約を、でしょう」とジェローム司祭は言った。

「あの人たちは、アノ人のことをアメリカ政府に通報するっていうんです。ああ、ジェローム司祭、私はどうしたらいいでしょう？ ソンナことをしたら、私の母を殺すようなものです！」

彼女は突っ伏してさめざめと泣き始めた。

「アナタのお母さんは今どこにいるんです？」

「母はジェーン・トンプソン氏に会いに行っています。母が言うには、全て解決できる手段があるっていうんです。それが何なのか、私には分かりません。わたし、母に行かないでって頼んだんです。でも、ああ、司祭様、~~母~~はモウ気が違ってんです。——それに——私も、似たようなものなのかもしれません。」

「カワイソウな娘や」とジェローム司祭は言った。「アナタが求めているのは、罪の許しではなくて、悩みからの解放のようですね。」

「アア、司祭様、わたしは倫理的な過ちを犯しました——私は傲慢で、怒りに心を任せるといふ罪を犯しているんです」

「シカシナガラ、」と司祭は正門を見ながら言った。「私達はアナタの懺悔を聞くのは後回しにして、明日の朝までとっておくことにしましょう。あなたはミサの前に私と懺悔室で会いましょう。そのときにアナタのお話は詳しく聞くことにします。我が娘よ、アナタの心はよくわかります。それでいま、気が急いでいるのでしょうか。それは正しいのです。懺悔室でひざまずいているような時間さえ割くことができないというときもありますからね。それが今のアナタの状態なのです。私達はアナタのお母さんを見つけ出さなければ行けません。すぐさま、アナタの家に行きなさい。もしもお母さんがそこにいたら、アナタの力を尽くしてお母さんを慰めるんです。そして、できることなら、私が行くまでお母さんをそこにとどめておきなさい。もしもお母さんがそこにいなかったら、お母さんを探すのは私に任せておくように。すくなくとも、あなたかアナタのお母さんのどちらかは、私の言葉がすぐに伝わるようなところにいなくてはいけませんよ。神サマはアナタを慰め、支えてくれています。アナタがお母さんを家で見つけることができるよう願っていますよ。お母さんに、怖れるこ

とはない、とお伝えクダサイ。」——彼は正門のかんぬきを開けた——「お母さんと、お母さんの娘さんはそのほか大勢の雀たちよりもずっと価値がありますからネ。神のものである司祭はその言葉をお母さんにささげましょう。どうぞお母さんに、娘のために教会がえらんだ夫を信頼するようにお伝えください。お母さんは、神の恩寵にあふれた結婚の儀式を娘が授かるところを見とどけなければいけませんからな。さあ、お行きなさい。もう少ししたら、私もジェーン・トンプソンのところに向かいましょう。その場所か、あるいはそのほかのどの場所にしようが、いずれにせよお母さんは見つかるでしょうからね。さあ、お行きなさい。あの人たちがアナタになにか強いるようなことはありませんよ。サヨウナラ！」

数分後に、司祭自身もまた、門を出た。

## 第14章 神に誓って

ジェローム司祭は、日の最後の名残が残る街角に立ち止まって、額の汗を拭いて脇に挟んでいた杖を再びおろすと、再び歩き始めた。そのとき、どこからともなく、音もなく誰かが近づいてきて急にものをたずねてきたので、彼はびっくりした。

「もしもし、この通りは何と言う名前の通りですか」

取り乱してあたりを見回しているそのやつれた顔を見るまでもなく、その乱れたボンネットとドレスを見ただけで、司祭は彼女が誰かがすぐにわかり、彼女に向かってフランス語なまりで答えた。

「ここはブルゴーニュ通りデスよ。いったいドコに行くつもりデスカ、デルフィーン夫人？」

彼女は飛び上がらんばかりに驚いた。

「アア、ジェローム司祭！わかりません——わかりませんわ。ジェーン・トンプソン様のお家はどちらかご存じ？わたし、あちらとか——こちらとか——行ってみたくはすけれども、どこにも見つかりませんの。」彼女は身振り手振りで話した。

「ワタシもそこに行くところデス」と彼は言った。「けれどもドウシテ、あな



たがジェーン・トンプソンに会いたいんですか、デルフィーヌ夫人？」

「わたし、あのひとに会わなくちゃならないんです」と彼女は答え、なかば向こうを向くと、夢中だがむしやんな様子で足を一步前にしっかりと踏み出した。「わたし、あのひとに言わなきゃならないことがあるんです、言わなきゃならないことが！」

「デルフィーヌ夫人——」

「ああ、ジェローム司祭、恵み深い神様の愛でもって、わたしにジェーン・トンプソン様のところまでの道を教えてください！」

ひどく気が動転しながらも、彼女は笑みを浮かべて、自分の図々しさを許していただきたいと懇願した。

「イッタイ何を彼に伝えようというんです？」と司祭は尋ねた。

「アア、ジェローム司祭」——彼女はふたたびクレオール訛りで答えた——「わたしはこの厄介ごとすべてに決着をつけたいんです。——おねがいからです、どうかいまは私にそのことは尋ねないでください。いまは一刻一刻が大事なんです」

司祭は彼女の懇願に降参した。

「こちらにイラッシャイ」と彼は言って、そして二人は歩いて行った。

ジェーン・トンプソンとヴァリラット医師は、そのころ決められていた町の境界からもう少し外に出た、バイユー通りに面して向かい合わせの家に住んでいた。どちらも大きく、白い円柱のある、四方のどこから見ても堂々たる立派な建物で、周りにはマグノリアの花が咲いていた。四隅にはおおきなカシの木が植わっていて、庭に薄暗く影を落としている。その広い、レンガの敷き詰められた道は背の高い、レンガの柱で支えられた門に続いており、芝に覆われた歩道の上には四角くて明るい赤のレンガが敷き詰められている。そして排水用水路の上を渡っている手すりのついた渡し橋の両側には、用水路をまたぐようにそれぞれ緑色のベンチが据えられているのだった。そこに、夕暮れ時にはいつも、必ずどちらの家の主人も涼しいガウンを身にまとった夫人と共に座り、白いターバンを巻いた二、三人の奴隷の乳母たちをかたわらにはべらせ、まわ

りに、赤ん坊からほとんど大人に近いくらいまでの、様々な年齢の子供たちを遊びまわらせるのだった。

ときおり、手招きをしたり呼んだりして、道の片側のベンチに座っている者たちがもう一方の側のベンチに座っている者たちと合流したり、両方の一族の子供や乳母たちが自由に行き来をするのを許されて、アイスクリームをたっぷり食べることもあった。たいていの場合、親たちは夕暮れの景色がよく見えるトンプソンの側のベンチに全員座るのであった。

このような状態が今日の午後もたまたま出来上がった。二人の夫が一つのベンチに座り、彼らの妻がそれに続くもう一つのベンチに座り、それぞれの組み合わせがどちらも大変静かに座っていて、それぞれが太陽の沈むときを待っている。そしてただときおり、彼らの脳裏を横切る記憶のひらめきについて言葉を交わすのみであった。皆がすっかり黙りこくっているときに、顔の青白い、ほそおもて細面の、しかし陽気な表情をした女性のヴァリラット夫人が、自分よりも二倍半の体重はあるトンプソン夫人のむっちりとして雪のように白い肌をしたむき出しの肘に軽く触れて、道路を斜めに隔てた向こう側のところに彼女の注意を引いた。

約百ヤードほど離れて、川の流れている方向に、心地よい木陰のある芝生が長くのびており、ちょうどよい歩道となっていた。こちら側の方には深い溝があり、向こう側には粗末なイトスギの柵が続いている。そしていっぽうの囲いの中にダイダイの木が並んで植えられ、もう一方の側には、斜めに延びるセンダンの木が溝に沿ってうえられていて、柵の上に枝を伸ばしている。最初、それらが鮮やかに陽光の中で光と戯れている様子がヴァリラットの注意を引き、それから、向こうから二人の人影が、柵のあいだから漏れる柔らかな、黄金の光のきらめきに満たされながら歩いてくるのが認められるのだった。

トンプソン夫人は彼女の美しい顔立ちによく似合う眼鏡を引き上げて、落ち着き払った偵察長のような調子でこう告げた。

「ジェローム司祭トアノ混血女デスワ」

そこにいた全員が歩いてくる二人の方に目を向けた。

「アノヒト、マルデ男ノヨウニ歩クノネ」と、会話の口火を切ったのがトンプ

ソン夫人のフランス語だったので、それに従ってフランス語でヴァリラット夫人が言った。

「イヤ」と医者の夫が言った「アレはひどく神経が高ぶった、異常な状態の女性の歩き方だよ」

ジェーン・トンプソンは女性をじっと見つめた後、こう言った。

「異常ねえ。ここが誇り高きルイジアナ州であるイジョーは、彼女も女らしく歩くことを忘れちゃいかんナ」——ほとんど英語でもフランス語でも分かるような冗談だったので、そこにいる者は皆笑った。ジェーン・トンプソンは自分の妻が面白そうに拍手しているのを見て、満足そうに頷くと、妻の方もしっかりと頷き返し、背をそらせると、少々努力しながら、手を前に組み合わせようとした。彼女の笑いは音楽のようでほんの小さく響くものではあったが、前の方で苦勞して組み合わせせた手を穏やかに上下させるには十分であった。

「ジェローム司祭がアノ女性としゃべっているわ」と誰かが言った。そのときちょうど、司祭は熱心に、穏やかに話を進めるために、彼がやってくるのを見ている夫婦二組のために弁護をしているところだった。それは昔からのなじみの口調だった。

「デルフィーヌ夫人、百ひゃくのうち一つはここにひといる方々が悪いかもしれマセンが、残りの九十九きゅうじゅうきゅうは、彼らの父親たち、母親たち、兄弟たち、そしてそのほかの市民が悪いんデスから、ね」

けれども、そんなふうになしかなる言葉に対して、デルフィーヌ夫人はたった一言の愛想の良い返事を返しただけで、しかもその答えは司祭の言葉を無視したものであった。

「ワタシハこの状態をあらゆる人すべてに満足のいくように解決したいんです。スッカリ全て」

「アノ人たち、コッチに来ますわ」と、半ばははっきりと、ヴァリラット夫人が言った。

「アア、本当ですわ」ともう一方がつぶやいた。そして夫婦四人は立ち上がり、愛想良く笑って、医者と検事は前に進むと司祭の手を取って握手した。

いいえ——とジェローム司祭は感謝しながら言った——座るのは遠慮しま

しょう。

「ジェーン、こちらが、モウご存じだとは思いますが、デルフィーヌ夫人です」

デルフィーヌ夫人は膝を折ってお辞儀をした。

「私の友人なんデスよ」と彼は付け加え、親切そうに彼女に微笑み、そして振り返ると、何かしら威厳のある様子をその目に宿して、友人の一团を見つめた。「彼女はある個人的なことで皆さんにお話があるんデス」

「私にかね？」とジェーン・トンプソンが言った。

「皆さん全員にデスよ。それでは、ワタシは——今晚は、ここで失礼シマシヨウ」彼を残念そうに引き止めようとする者は誰もいなかったが、しかし司祭はデルフィーヌ夫人のほうに振り向いた。彼女は何か言いたそうに何かつぶやいていた。

「アア、そう、確かにそうデスね」と司祭は、一团に向かってこう付け加えた。

「彼女はワタシに彼女の話が信頼が置けるかどうか言ってほしいといっています、ええ、彼女の話は掛け値のないホントのことデスよ。ソレデハ、みなさん、今晚はこれで、ごきげんよう」司祭はそういうと、皆と握手をして、去って行った。

夫婦4人は席に座り、そして立っているデルフィーヌ夫人に皆が目を向けた。

「私達に何か言いたいことがあるんだって？」とジェーン・トンプソンが聞いて、本来なら頭に布を巻いてそこに髪を仕舞い込まなければならない混血女のくせに、白人女性のようにしてボンネット帽を身につけている彼女の姿を眉をひそめて眺めた。

「はい」とデルフィーヌ夫人は言って、ベンチの一方に身を寄せると、ベンチの一つをつかんで「私は何もかもお話ししたいんです」と言った。「ヴィヌヴィエイユ氏はこの地上で一番立派なお方です。私はあの方に迷惑をおかけしたくないんです。いいえ、迷惑をかけるだなんて、そんなことでできません。私のすべてをかけても出来はしません」彼女は扇で自分をおおごうとして、検事から顔を背け、彼女の視線は地面に落ちた。

「おかけなさい」と、幾分か急にヴァリラット医師は言って、彼の座っているところから優しく彼女を導いてベンチの隅に座らせた。誰かが立たなくてはならなくなったので、夫人たちは立ち上がった。黒人と白人の二つの人種は同じ場所に座ることができないのだ——すくなくとも、公の場ではそうであった。

「気付けをとっておくれ」と医師が妻に言ったので、妻は小瓶をとって渡した。デルフィーヌ夫人は再び立ち上がった。

「具合が悪いようでしたら、みんなで中に入りましょう」とトンプソン夫人がいい、彼らはみな門を通過して歩道を歩き、敷居を越えて、一段と低くなって涼しい客間へと入って行った。

トンプソン夫人は混血女に座るように言った。

「それで？」とジェーン・トンプソンはいい、残りのものも席に着いた。

「オカシインデス——おかしいんです」とデルフィーヌ夫人は言って、悲しそうな表情で無理に笑顔を作ろうとした。「誰もこの可能性のことを考えないなんて。全く明白なことなんです。ただ素直に見ていただければ分かるんです。私の言いたいのは、オリーブのことなんです」デルフィーヌ夫人は彼女のドレスの前のボタンを外すと、自分の胸元に手を入れた。「それに、オリーブ自身もこの可能性を全く考えていないんです。彼女はそれを言い表す言葉も知らないんですから」

デルフィーヌ夫人はちいさな肖像写真をその胸元から取り出した。ヴァリラット夫人がそれをジェーン・トンプソンに渡した。「ソレガチチオヤデス——それが娘と父親です」とデルフィーヌ夫人は言った。

その肖像写真はそこにいるものたちに順番にまわされ、それを見た者は興奮した賛嘆のため息とつぶやくような称賛の声をもらった。

「娘さんは父親そっくりですわね」トンプソン夫人は厳粛に低い声で言って、それを彼女の夫に手渡した。

ヴァリラット医師はデルフィーヌ夫人を見つめた。彼女の顔は真っ青だった。彼女は震える手を自分のスカートのポケットに入れて、もう一つの写真を取り出し、それは最初に取り出したものと対をなすものであった。ヴァリラット医師はそれを見ようと手を伸ばし、デルフィーヌ夫人は彼にその写真を渡した。

彼はそれをしばらくの間見つめると、その目が突然光って、その写真を検事に渡した。

「そしてそれが」——デルフィーヌ夫人の声はそこで途切れた——「そしてそれが、彼女の母親なんです」

他の三人は即座にジェーン・トンプソンの椅子のところに集まった。彼らはさらに感じ入ったようだった。

「これは疑いようもない事実ですわ！」とトンプソン夫人がつぶやいた。

ヴァリラット夫人は驚いて彼女を見つめた。

「これらの顔を見ればそのまま証拠になるくらいですわ」とトンプソン夫人はさらに言った。

「ええ！そうなんです！」とデルフィーヌ夫人は興奮して言った。「それが証拠なんです！これ以上の証拠なんてありません！私も自分のいっていることが真実だと誓って申し上げます！でも、これ以上の証拠はありませんわ！これこそ皆さんが欲しがっている証拠なんです！ああ、どうか！ただこれらの写真をご覧ください！」

デルフィーヌ夫人の動作はひどく興奮したものになった。

ジェーン・トンプソンは厳しく彼女を見つめた。

「そうはいつでも、あなたは真剣にこれらの証拠について真実であると誓えるのですね」

「もちろんです——」

「神に誓って真実だと宣言しなくてはならないな」

「もちろんです、トンプソン様、**もちろん**誓います。宣誓書を作って、そしてワタシハ神の前に誓ってそれが真実だと申し上げます！ただ」——そうやってデルフィーヌ夫人は他のご婦人方へと振り向いた——「どうかこのことをオリーブには言わないで下さい。あの娘は信じないでしょうから。こんなことを知ったら、あの娘の心が壊れてしまいます！そんな——」

召使いがやってきて、トンプソン夫人になにかこっそりとささやき、トンプソン夫人はいそいで立ち上がって玄関の方に向かった。デルフィーヌ夫人は無意識のうちに立ち上がりながら、言葉を続けた。

「お分かりでしょうか、私はオリーブを赤ん坊の頃から世話してきました。彼女はこのことは全く知りません。オリーブの父親は生後二ヶ月のときにオリーブを私のところに連れてきたのです。彼女の母親はこの地の出身でしたが、船の中で死んでしまいました。父親の方は、故郷の地からここへまっすぐにやってきたという訳ではありません。彼の故郷の人々は彼が結婚していたとは全く知らないのです！」

話し手はびっくりしたように急にあたりを見回した。玄関の方から、興奮して話す声が聞こえてきたのだ。

「そんなはずがありませんわ、トンプソン夫人！」と、若い娘の叫ぶ声が聞こえてくる。

デルフィーヌ夫人の表情がひどい苦悩と驚きを示し、彼女は口を開いて何か言おうとしたが、何かを言い出す暇もなくオリーブがドアのところに姿を現し、母親の腕の中に飛び込んできた。

「お母さん、お母さん、ワタシのお母さん！」

トンプソン夫人は、目に涙をいっぱい溜めて、彼らを引き離すと、デルフィーヌ夫人を椅子に座らせたが、オリーブの方は膝から崩れ落ちると、泣き続けた。

「ああ、お母さん！ドウカあなたが私のお母さんだと言って下さい！」

デルフィーヌ夫人は一瞬、自分を見上げている顔を見つめて、それから顔をそらすと、苦痛に満ちた長くて低い苦しみの叫び声をあげ、ふたたび娘の顔を見ると、懇願する娘の顔を両手にとって、それからこう言った。

「ああ、私の愛しい、小さな娘、アナタはワタシノムスメデハナイのですよ！」

デルフィーヌ夫人はそう言うと言目を閉じて、後ろざまに倒れ込んだ。二人の紳士が彼女を支えようとはじかれたように前に出て、デルフィーヌ夫人をソファに寝かせた。

デルフィーヌ夫人が再び意識を取り戻したときには、オリーブが黙って嗚咽しながら、デルフィーヌ夫人の頭のところでひざまずいていた。

「お母さん、イトシイお母さん！」オリーブは弱々しく言って、その唇にキスをした。

「イエハカエリマシヨウ」と母親は、大儀そうに言った。

「私のお家に来るといいですわ」と、親切そうにヴァリラット夫人が言った——「私の家は道を隔てた真向かいですもの。アナタの調子が戻るまで私が看病してあげますわ。そしてオリーブはここにトンプソン夫人と一緒にいらっしやい。あなた方二人は、ただほんの道を隔てて離ればなれになるだけですわ。」

しかし、デルフィーヌ夫人は自分の家以外には帰るつもりはなかった。オリーブは自分についてきてはいけない。そこで、トンプソンとヴァリラットの家族は召使いを一人か二人、デルフィーヌ夫人の家にかかせて、デルフィーヌ夫人と寝起きを共にして手助けをしたり、彼女を守ってやったりすることにしようとした。けれども、デルフィーヌ夫人が受け取ったのは一時的な手助けとして、彼女の伝言を親戚の夫婦の男女二人に送り、やってきて彼女と一緒に住んでくれるようにと伝えることだけであった。

時が経つにつれて、やってきた夫婦——貧しく、臆病で、やくたいのない二人組——がその土地の相続人となった。彼らの子どもたちが彼らの後はその所有者となった。しかし、その家が彼らのものとなろうが彼らの子どもたちのものとなろうが、その家には特有の習慣が染み付いており、それは守られなければならなかった。そして、今日に至るまで、隣近所の者たちは、すでに言われてきたように、そのすっきり閉め切られ、まるで人の住んでいないような様子でひっそりと暮らしているのを、その住民が「混血だからなんだよ」と言う言葉だけで十分に理由がわかるかのようにうわさをし合うであり、確かにそれで十分な説明となっているのだった。

## 第15章 主よ、憐れみたまえ

次の土曜日の午後は暑くてきれいな青空が広がっていた。ジェローム司祭の小さな教会の MARIA 像を安置した壁龕へきがんの前にかかって燃えているランプは、その後ろにある窓の枠と同じように動くことなく静かに燃えているのだろう。まどろんだ空気の中で動かずにいる木々や葡萄のつるの葉と同じように、聖ヨセフの杖に咲いた小さな百合の花も、半ば開いた窓のなかで輝きながらたたずんでいる。オルガンの置いてある廊下を下ったところには、司祭が座っている懺悔室のドアがすこし開いて、そこから一筋の光が斜めに落ちてきて、そのなか



の懺悔をする者が訪れる格子戸の後ろで、小柄な司祭は座って、額に玉のように浮かぶ汗が彼の顔に流れ落ちるのを静かに拭きながら座っていた。時折、人影が静かにそのドアを通して入ってきて、しばらくの間、一筋の光がとぎれて、年取った老婆、あるいは小さな少年、あるいは立派な紳士といった、改悛者の声が聞こえてくる。それを聞く司祭の耳には、何年もの間、声でしか知ることのない者たちが、司祭が聞いているその耳の近くにしばらくの間ひざまずいては、神の加護を祈り、我々誰もが皆おなじ同胞であることをしめす人生のしくじりや間違いを述べるのであった。

特に長く、へとへとに疲れる日であった。最初に、たいへんな人数がやってきて、急いで食事を済ませなければならなかった。それから大司教のところを訪れて、ある慈善の施しの企画について話し合わなければならなかった。それから自分の小さな家に戻ってきて、そこからトゥールーズ通りの「ヴィヌヴィエイユ氏」の銀行を訪れた。銀行ではあらゆる窓口が開いていて、活気があり、仕事は確実に、そこの長を務めているヴィヌヴィエイユ氏が、まるで、実際にはいないものの、そこにいるかのように業務が行われていた。政府の捜索は終わり、捜査官たちは去り、いつもよりも賢明な判断をして、おおよけには（彼らの知識と信念の限りにおいて、証拠にもとづき、そして特に非の打ち所のない目撃情報の確認にもとづいて、ヴィヌヴィエイユ氏は銀行家であると証言され）、海賊ルメートル船長は死んで墓に埋められたということになった。昼になると、司祭の小さな教会で結婚式が行われた。その時の光景はいまでもジェローム司祭の目に鮮やかに焼き付いている。ひざまずく新郎のヴィヌヴィエイユと新婦のオリブ。新郎はどきもかしこも立派で裕福な男性で、どこをとっても力強さと心の優しさを内に込めた偉丈夫であり、花嫁は、彼女の青白い顔に聖人のような憂いを浮かべ、畏敬の念のこもった目を崇拜する救い主キリストの像に向けていた。幾人かの友人たちが後ろに控えていた。トンプソン夫人は、大柄で、明るく、大変満足そうであった。ジェーン・トンプソン検事の方は、彼のしっかりボタンのかかったコートの中に、デルフィーヌ夫人が宣誓供述書として差し出した書類をのぞかせていた。ヴァリラット医師と夫人は感じよくこの結婚を承諾して参列していた。そして最後に——けれども、もっとも最初

に取り上げるべき——ひとりの小柄で、身を縮めるようにしている女性が、片一方の側に、色あせた式服と薄汚れたボンネットの帽子をかぶった姿で参列していた。彼女は石のように動かずに座って、しかし不安そうな面持ちで、小さく、落ち着かなげな黒い目を緊張して疲れきった顔からのぞかせて、苦痛に歪んだ心が一時も平穏でいられずにいるのを示していた。そして花嫁の記憶の中においても、もちろん新郎にとっても、そしてこれから友人になるかもしれない、後ろに控えている人々にとっても、その場に席を占めている人々にとっても、その女性の姿とそして疲れ果てた司祭の姿を引き離して考えることはできずにいた。あるいは、皆が教会を離れて帰ろうとしている時、彼自身の低い声で彼女を招待しているその声、「午後に懺悔室にいらっしやい」という声を、彼女の姿と引き離して考えることができずにいた。

そして、懺悔室にやってくる足音が途絶えてかなりの時間が経ち、道路の右側をすすみながら十字路を音もなく渡って停留所から停留所へと時折行き交うもの以外には、明かりや人影などもぼったりやんでしまった。けれども、ジェローム司祭は懺悔室でぐずぐずしていた。

「彼女はきっとやってくるに違いない」と彼は考えた。「彼女はきっと来ると約束したのだから」

しばらくして後、長い間沈黙していたので、敏感になった彼の感覚が、人物が近づいてくる物音をひとつ、ふたつと感じ取った。そして次の瞬間、懺悔をしにやってきた人物が彼の懺悔室の格子戸の前に音もなくひざまずいた。そしてささやき声が、彼が聞こうと思って待ち受けていた声が、空気を振るわせてつたわってきた。

「ワタシニオユルシヨクダサイ、司祭サマ、ナントナレバ、ワタシハ罪ヲオカシテシマッタノデスカラ」

彼は彼女に神の許しを与えた。

「カミノミココロノママニ——アーメン」懺悔に来た人物はそうつぶやき、それから、クレオール訛りの柔らかな調子で、こうつぶけた。

『「ワタクシハ告白イタシマス、万能の神サマ、永遠の処女マリア様、神に愛されし大天使ミカエル、神に愛されし伝道師ジョン、聖なる使徒の聖ペテロと

聖パウロ、そしてスベテノ聖人たち、ワタクシは考えと言葉と行動の全てにおいて大変な罪を犯してシマイました。大変な過ちを、大変な過ちを、取り返しのつかない過ちを。』わたしは三週間前の土曜日に懺悔をして、それから罪の許しを受けました。そして私は身をもって犠牲を払いました。そしてソレカラ——」そこで彼女は言いよんだ。かすかな動揺が伝わり、まるで彼女がゆっくりと崩れ落ちたかのようにだったが、また再び動揺が伝わってくると、こんどは彼女は身を持ち直したようであった。しばらくしてから、彼女は続けた。

「オリーブは私の本当の娘デス。ジェーン・トンプソン氏に見せた写真は私の娘の父親の妹で、私の娘が生まれる前に死んでしまいました。オリーブの白い肌は白人の父親や父親の妹のほうにそっくりですワ。けれども、アア、神サマ！アナタだけはご存じです。ああ、オリーブは、私の娘なんデス！」

彼女は言い終わると、じっとしていた。ジェローム司祭は待っていたが、物音は全く聞こえてこなかった。彼は格子戸越しに見てみた。彼女は膝をつき、額を組み合わせた腕の上に載せて、じっと動かずにいた。

司祭は許しの言葉を繰り返した。けれども、彼女は微動だにできなかった。

「ワガムスメヨ」と彼は言った。「心安らかに自分の家に戻りなさい」けれども彼女は身動きしなかった。

彼は急いで立ち上がると、自分のいる部屋から出て、彼女を抱き上げた。そして彼女の名前を呼んだ。

「デルフィーヌ夫人！」彼女の頭は彼のひじにぐったりと倒れ込んだ。一瞬、彼女の両目には命の光がまたたき——その目が輝いて——だがそれはすぐに消えてしまっ、そして司祭の両目からは涙があふれ、死んでしまった彼女の顔に滴り落ちた。司祭は顔を上げて天国を見上げると、こう叫んだ。

「神よ、ドウカこの罪を彼女の咎とされナイで下さい」